

中学校高等学校シンポジウム 「マイライフ」開催

平成21年11月14日(土)、文京キャンパスのブロッサム・ホールにおいて、跡見中高では初のシンポジウムが開催されました。跡見学園理事長兼跡見学園中学校高等学校校長の山崎一穎を司会進行役に、各世代の跡見中高卒業生が、「マイライフ」をテーマに学校生活の思い出や、人生の転機などについて熱いトークを繰り広げました。受験生、中高生、保護者など多くの参加者が、熱心に聴き入る姿が印象的でした。



自由な校風の中に 跡見らしい温かさがあった

パネリストの皆さんにとって、跡見とはどういった場所だったのでしょうか。渡邊さんは、校則がなかったことが印象的だったそうで、「やりたいことを自分で決められる学校だった」と言います。また、奥牧さんにとっては、身だしなみや人との接し方など「社会で生きていくための女性としての基盤」を教わった場所だったとか。

住川先生の一言で、頑なな気持ちも溶けました。



騎馬隊所属
渡邊 綾子氏

強い気持ちを持って、憧れに挑戦してください。

また、鈴木さんと永野さんは「人間関係を培った所」だったそう。「友達や先生方と信頼できる人間関係構築したからこそ、社会に出ても恐れることなく外に出て様々な人と接し、傷ついては立ち直り、視野を広げることができました」と鈴木さん。一方永野さんは、「誰かが悩んでいる時立ち直るまで静かに見守ってくれる温かい人間関係が、居心地よかった」と振り返っています。



谷津保健病院 内科医
奥牧 朋子氏

強い意志を持って夢に挑戦する

では4名の方々ほどのようなライフデザインを立て、現在の仕事に辿り着いたのでしょう。高校時代に偶然騎馬隊の演技を見たことで馬術に興味を持った渡邊さん。「大学は馬術部のある学校に志望を絞りました。そのため、推薦入学をお断りしたこともありました」。念願叶って馬術部に入った後は既金が生活の中心の日々。そして卒業を控えた頃に騎馬隊の調教師の募集があり、「偶然の重なりで今の仕事に就いた」のだとか。父親が医者であった奥牧さんは、反抗期も重なり「医者にはなりたいくない」と思っていたそうです。しかし、社会科の担当であった住川先生のアドバイスで頑

なな気持ちが溶けたとのこと。大変なこともあるけれど、今は医者が天職だと奥牧さんは言います。

鈴木さんは高校生の頃からバイオリン製作の仕事に憧れていました。一度は夢を諦め大学へ進学します。しかし、再び夢を追いかけてイタリアへ留学。「やってみるしかない」という気持ちで飛び出しました」と鈴木さん。また、帰国後にバイオリン製作学校を開校した際は、生徒が自立するために

跡見の温かい人間関係は居心地がよかったです。



リユータイオ・バイオリン製作者
鈴木 郁子氏

好奇心を持って学び、柔軟な頭を作ってください。

何を教えられるのかと心理学を学び、現在はカウンセラーとしても活躍されています。

女子の進学率が低かった時代に、永野さんはもっと学びたいと進学を決意。「18歳の私にとって大学進学は大きな決断でした。決めたからには、自分でこの決断を支えねばと、様々なことを学びました」。そんな中ふと出会った「フィリピン」に興味を持った永野さんは研究者の道を進みます。



神奈川大学教授
永野 善子氏

人への思いやりや感謝の気持ちを忘れずに

しかし、夢を叶える中には壁もあったはず。山崎理事長は常々「夢見る少女ではないけない、夢は作り出すものだ」と生徒たちに言うのですが、どのような考えが夢を切り拓くことになったのでしょうか。「中高時代のバスケットボール部の経験が糧になっていきます。頑張った、やりきったという気持ちは人生の支えになるはず」(奥牧さん)。「環境の変化や価値観の相違に適應できる柔軟な頭を持つこと。それには好奇心を持つて学ぶ姿勢が大切です」(鈴木さん)。「自分を曲げずに貫いたことで道が開けた」(永野さん)。「私はまだ、困難にぶつかる経験は少ないですが、中高の部活で培ったガッツで乗り切ります」(渡邊さん)と皆さん話してくれました。



最後に、4名の方々から次のようなメッセージを頂きました。

「時には頑固になっても、憧れたものには挑戦してください」(渡邊さん)。「日々の努力を惜しまずに。一つのこと熱中することとは社会の中で必ず役に立ちます」(奥牧さん)。「好奇心を持って勉強してください。また、人への思いやりを忘れずに」(鈴木さん)。「両親に感謝の気持ちをもち、そして一日一日を大切に過ごしてください」(永野さん)。

そして山崎理事長は、「本日は世代の違う4名の卒業生に、それぞれのかけがえのない貴重なライフデザインのお話を伺いました。その中に、共通する考え方や姿勢が感じられたことと思います。それこそが跡見の教育の伝統と本質なのではないでしょうか」と締めくくりました。

最後に、4名の方々から次のようなメッセージを頂きました。「時には頑固になっても、憧れたものには挑戦してください」(渡邊さん)。「日々の努力を惜しまずに。一つのこと熱中することとは社会の中で必ず役に立ちます」(奥牧さん)。「好奇心を持って勉強してください。また、人への思いやりを忘れずに」(鈴木さん)。「両親に感謝の気持ちをもち、そして一日一日を大切に過ごしてください」(永野さん)。

4名に共通するものが、跡見の伝統と本質です。



跡見学園理事長
跡見学園中学校高等学校校長
山崎 一穎

模擬裁判、開廷!

平成21年10月9日(金)の放課後、跡見李子記念講堂で東京弁護士会所属弁護士のボランティアによる協力を得て、高校3年生の政治経済選択の生徒たちが模擬裁判を行いました。

生徒たちは裁判官役、検察官役、被告人役、弁護人役、証人役に分かれ、弁護士の指導のもと事前準備をした上で本番の「法廷」に臨みました。実際の刑事裁判同様、裁判官役は「起訴状」に記載された「公訴事実」しか知らされていません。

「法廷」では検察官役が住居侵入窃盗未遂事件について被告人の有罪を主張し、証拠物や証人の証言により立証を行うのに対して、弁護人役が反論し、被告人質問では被告人自身が供述します。裁判官役は、ここで明らかにされる事実を基礎に判決を下すのです。そのため全員が真剣そのもの。証人尋問では「異議あり!」の声も飛び出すなど緊迫した議論が展開されました。結果は、住居侵入については有罪、窃盗未遂については無罪として、懲役3ヶ月執行猶予1年の判決。客席の「傍聴人」たちの多数も同様の意見でした。

指導していただいた弁護士からは、「(検察官役2人の)淡々とした分かりやすい弁論、豊み掛けるような厳しい質問、どちらも良かった」、「弁護人役は、オリジナリティのある鋭い質問をしていた」、「裁判官役は白紙の状態での臨み、異議にもよく対処していた」等の講評をいただきました。無事に「裁判」を終えた生徒たちからは、「被告人席に立つと」頭が真っ白に。皆さん、罪は犯さないほうがいいですよ(被告人役)、「弁護人の追及がなかった」(証人役)、「もっといろいろ主張できただけです。控訴したい」(検察官役)、「判決を出すというのは重い行為」(裁判官役)などの実感のこもった感想が。「模擬裁判はとても良い経験です。ぜひ政経を選択してください!」という後輩への熱いメッセージも相次ぎました。

裁判員制度の開始により、生徒たちが将来裁判員として刑事裁判に参加することもあるでしょう。模擬裁判を通じて社会の仕組みについての理解を深め、報道される様々なニュースに一層の関心を持つてくれればと願っています。

政経の模擬裁判は、中高生徒だけでなく保護者の皆様も「傍聴」することができます。平成二十二年度も開廷予定です。

